NPO地球の緑を守る会/〒121-0072 足立区保塚町1-6 /Tel:03-6783-4707 Fax:03-6783-5595/ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞhttp://midori.mond.jp/

フォレストニュース
植林が地球を救う
令和3年(2021)８月10日
No. 164
発行　高津啓洋

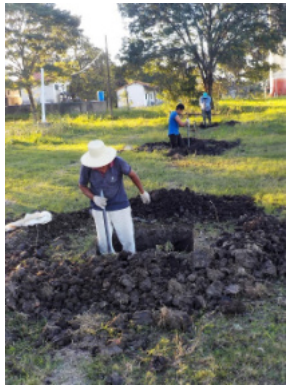
# パラグアイで植樹

世界でも森林伐採率が最悪なパラグアイでの、植樹活動を行った奉仕隊。今年も（一般社団法人）南北米福地開発協会と国際協力青年奉仕隊を組織し、21回目の植樹活動を行いました。（7月9-23日）

現地では大きな、植樹用の穴が必要で、土地は往々にして深く入ると粘土質でさらに塩分が濃いところが多くあります。

かつては、奉仕隊が植樹をした、ラパッチョなどの木が、数年は花を咲かせていたが、突然に枯れだすという過酷な環境でもあります。

今年は、植樹活動と共に今年の青年奉仕隊は、レダの東40キロほどに位置するマリアアウシラドーア村の学校へ行き、学校の遊具施設の設置を行いました。生徒さんたちや、地域の人たちから大歓迎を受けてきました。また、学生たちとの交流も行われ、コロナ禍ですが、マスクをしながらでも有意義な時を持つ事が出来ました。



# 宮脇昭先生に感謝

宮脇昭先生は、当会の顧問をされて、私たちに様々なアドバイスをくださいました。お元気にされていた時もありましたが、7月16日に脳出血のためご逝去されました。93歳。（写真は会員と共に植樹祭で）

**高津啓洋代表から「宮脇先生のご逝去を新聞報道で知りました。いつかこの日が来ることは覚悟していました。時勢に流されず、黙々と地球に木を植え続けたご生涯でした。当会の顧問を務めてくださったことは、『いつどんなときも木を植えなさい！』という、無言の教えだったと肝に銘じています。心からご冥福をお祈りいたします。」**

（地球の緑を守る会代表高津啓洋）

お元気な宮脇先生と高津夫妻と長野の会員

**［お知らせ］**2021年セミナーは、11月20日（土）を予定しています。

# フォレストレター

2021年8月10日

## ●宮脇昭先生を偲んで

4000万本の木を植えた男
熱帯林再生を指導
堤防を凌ぐ海岸地帯への防潮林を推進

岩手県大槌町の植樹祭で、宮脇先生を囲んで

当会顧問である宮脇昭先生が死去されました。　93歳　横浜国立大名誉教授

土地本来の樹木で森を再生する植林活動に長年取り組んだ植物生態学者で横浜国立大名誉教授の宮脇昭（みやわき・あきら）先生が7月16日、脳出血のため死去されました。93歳。葬儀は近親者のみで営まれました。喪主は妻ハルさん。

宮脇昭先生は、岡山県出身。広島文理科大（現広島大）卒で1973年横浜国大教授。96年国際生態学会会長などを務めました。

阪神大震災で深刻な被害があった神戸市長田区や東日本大震災で被災した宮城県南三陸町、岩手県大槌町の植樹祭（掲載写真・2014年4月19日）で指導しました。

横浜国立大助手時代に2年間のドイツ留学で、土地本来の植生が病気や災害に強いなどとする理論を学び、帰国後は公害の広がりや災害の頻発、激甚化による国内環境の深刻化を予測。災害から人命を守り、動植物の生態系を育む防災環境保全林づくりの重要性を呼びかけました。

徹底した現場主義を貫き、スギやヒノキの単一の針葉樹を植林する従来のやり方に対して、多様な広葉樹を中心とした苗木の栽培、植樹方法・混色密植栽培を確立しました。その土地本来の樹木を調べて植える植樹方法は「宮脇方式」と呼ばれたました。

**【宮脇語録】**

いろいろな講演会で話されたものの一部を使わせていただきました。

◎私たち人間が、今生きていることは奇跡である。今大事なことは、本物か偽物かを見極めること。言い換えれば、毒を排除すること。そして、今生きていることを大事にするためには、心・命・遺伝子を守る森を造ること。

◎生物社会は、互いに「がまん」をし合って生きている。共生するということは、仲良しクラブのように生きていくことではない。少々嫌な相手でも、気にくわないことがあっても、がまんをして生きていくこと。がまんのできない生物は、この地球上では、生きていけない。

◎私は、本物が好きだ。木を植えることは、命を植えること、明日を植えること。だから、本来は、行政が木を植えなければいけない。本物の木を植えよ。本物の木を植えることは、小手先では出来ない。だから、行政は、本物に金をかけよ。

◎森を支えているのは、本物の親分の木と、その下の子分の低木や草である。世界の歴史を見ても、放牧は森を破壊するがん凶である。現場・現場・現場。現場には、研ぎ澄まされた自然発生的なかすかな情報がある。